之助が累難の生活に滿足し「憂きことの尙この上に積れかし」と歌つた如く又日蓮上人の「苦を苦と悟り樂を樂と」悟つて此の難局を切り脫け以つて海外萬里の波濤を開拓せよと叫んで降檀するものあります。

懺　悔

村田海仙

吾人の見聞し覺知する所の事物。一として吾人に疑惧の念を與へ、惑の情を促し、吾人の決意を鈍らし、吾人の確信を搖がすものならざるはないのである。日夜此の間に營々として、得るに喜び喪ふに泣き、榮ゆるに驕り衰ふるに哀んで居るのである。

かくした中の精神問題をば空理に拋棄せずして眞身になつて考ふる時、心に先づ起るのは自己は如何てふ問題である。

デカルトのやうに單純ではあるが、深刻に「吾思ふ故に吾在り。」と結着するか、悶えの絕望に於て小乘者流のやうに「灰身滅智」と斷じて消滅の裡に行きづまるか、それとも、大乘の徒のやうに悶えの絕望をつきとめ、更に一段の努力と懸命の求道に一道の光明を見出して「常樂我淨」を高唱しつゝ向上の大道を濶步して行くか、何れにしても醉生夢死の徒の自己に對する觀念把持より更に一步若しくは數步進めたものである。

こゝに「圓融」と云ふ意義の奧底に自分を安住せしめて見れば「ゴッ〳〵」といきり立つものは存在しないで、豊かにゆつたりと大きく急潮も緩潮に即して、妙音を出し、春のやうに暢々として停滯の醜なく、秋のやうに淸朗にして枯渴の酷に陷らざる世界を見出すであらう。無我の上の我を認め、それと同時に我の上の無我を認め總結しては久遠からの自己に蘇らしむるのである。

これは論理的遊戯から生れ出たる自己の概念ではなくて懸命の經驗に迫られて出た、打てば憂々と鳴るの自己である。切れば血が出る自己である。切れば血が出る自己とは何であるか。凡夫としての自己である。凡夫としての自己と即したる佛としての自己である。佛としての自己に即したる凡夫としての自己なのである。

此處に「日蓮が弟子檀那」なる自覺が生れる「日蓮が弟子檀那」てふ自覺は本化の道に入り來りたる人々の第一の法喜である。こゝで吾人は云ふ。第一の法喜に逢着した人々は外面の力强さを見せつゝあるが、そは皮殼の力であつて卵が活躍する鳥として存在するが爲めには、その皮殼を脫せねばならない事で

ある「當体義抄」に

所詮妙法蓮華の當体とは法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是也。正直に方便を捨てゝ、たゞ法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道法身般若解脫の三德と轉じて三觀三諦即一心に顯れ、その人所住の處は常寂光土也。能居所居身土色心俱体俱有無作三身本門壽量の當体蓮華の佛とは日蓮が弟子檀那等の中の事也。」

この御文はすぐに自身の上に降りかゝり、自らが佛として直ちに存在するやうな氣がするのであるが、若し此の際に第三者を立たしめて其人を深刻に觀察せしむるならば、外殼の人々と當体義抄との間の連鎖は色讀体驗ではなく、心讀思索ですらなく浮ける悦びを中核とした感興であることを看取するに困難でないと信ずるのである。

渴したる人々が水を求むるは必然である。同一の平面を左往右來するのも求めには違ひないが、同一の平面に於てなされたる求めに應ずるものは自然の泉で、この際の獲得は眞の獲得ではなくて「求めよさらば與へられん」の與へられたるものであつて「自得」とは自ら異る所があるのである。自ら踐みしむる高原の乾土を深く穿りつゝ潤へる土を見、更に湧き出ずる淸冽の水に接して驚異の裡に「此に水あり」と叫ぶのは獲得の內容に格段の相違ある事は吾等の經驗が雄辯に物語つてくれるのである。

「求めよさらば與へられん。」と日蓮上人の中に自己を見出さうとするの努力は同一の平面を驅けて日蓮聖人の懷に入りつゝ長夜の眠りに陷らんとするのである。この時代の信仰生活に於ける特徵は外殼的征服に力强きことである。自己が懸命に日蓮上人の方へ驅け行かんとすると共に周圍の人々を自己を中心とした世界へ吸收しようとする事である。

いきなり立てる直線的の心持は一本筋に急進的に、快哉を叫ぶのであるが、それは單なる他愛もない快哉で火のやうに燃えるには燃えるが水のやうに滿々たる所がないのである。

日蓮が法華經の明鏡をもて自身を引向へたるに都てくもりなし。過去の謗法我身にある事疑ひなければ此罪を今生に消さずは未來爭でか地獄の苦をば免るべき。過去遠々の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して未來の大苦を免れんと勘へしに……無量劫の重罪一生の內に消へなんと謀てたる大術少しも違ふ事なく、かゝる身となれば所願も滿足なるべし

（呵責謗法滅罪鈔）

菩薩なり佛なりと主張し來りたる自己は慥かに其一面を有して居たのである、日蓮上人を自分と同一平面の上に置いて日蓮上人の許に驅け行かうとする道程に於て、輕々と運ぶ一歩〳〵に輕快の味を嘗めつゝ夢の如く叫ぶ聲でなくてなんであらう。思索と名づくべき思索もなく、体驗と名づくべき体驗もなく、而も思索と体驗とは既に經過したるものゝやうに喧嘩の聲を聞いて飛び出した町奴のやうに同じ平面を驅けてゐるのである。

今謗法の醉さめて見れば酒に醉へる者父母を打ちて悦びしが

醉さめて後歎きしが如し歎けども甲斐なし、此罪消へがたし

何に況んや過去の謗法の心中に染みけんをや。

赤裸々の自己は何であるか。現實のこの悶えの自己は何であるか。理想に見た自己を現實に即せしむることなしにありのまゝに見た現に生ける自己、信念把持の缺陷に苦しみつゝある自己喜怒哀樂にぐる〳〵と感情の轉換をなして泣き喜ぶ自己、切れば痛いと叫びつゝ碧血を出す自己、そは何であるか。かくした悶えの苦るしみを現在のあらゆる刹那に味ひつゝある自己は、同時に苦るしめらるべき自己であらねばならぬ。所謂苦るしめらるべき因を具した果の自己でなくてはならぬ。

こゝまで考へて來て縱に見る自己の一端が心に浮んだ時に光明の一閃は見へて來るのである。「先業の所感なるべし。」の一語を聞いて驅け廻りて疲勞したるわが身が自己のポイントの上に安住して深く探り入らうとするとき、更に新たなる渾身の力が涌き出でて長途の遠征を物の數ともしない所謂蘇生の痛感が泌々と味はれるのである。

醜陋と多苦多難の自己を探り進みつゝ湧き出づる泉を見た折に渾身の力をこめて叫ぶのは「吾は凡夫なり」の痛切なる叫びである。「吾は凡夫なり。」の叫びをなす、凡夫は既に單なる凡夫ではなくリファイン（精錬）されたる凡夫として出現するもので、叫びが直ちに懺悔の階級にまで進み行く時に光りある凡夫が輝くのである。學ぶ事難きに非ず、信ずること則ち難し、信ずること難きに非ず、持つ事實に難し。

明治天皇御製

われと我が心折々かへりみよ
しらず〳〵も迷ふことあり

學徒と大法西漸

永田壽祀

地上には幾つかの噴火口が活動を開始し、もの凄い嵐が吹きまくり人類史上未だかつて經驗せざる狂亂的氣運の中に立つて居り政治家は狂奔し實業家は血眼になり、學者は沈思默考に耽つてゐる今日、世界を襲ふてゐる世紀の嵐は容易に鎭まろうとせず世界を擧げて明日への運命を測り兼ね不安と焦燥とに、おのゝいてゐる。かゝる惡天候の今日我國に於ては皇紀二六〇〇年の意義ある年を迎へ更に進んで內政外政共に充實を計り新東亞共榮圏、要道の確立を期して皇道翼賛新体制を樹立し實に二六〇〇年の歷史を飾らんとしてゐるのである。然るに學生並に我祖門下は今事變の國家的危難に於て、ひとり軍部の責任との